

〈原故郷〉の新芽を問い続ける人

金光林エッセイ集『自由の涙』に寄せて

錆びかけた鉄条網の間からは

草の新芽が首を擡げる

隣土の地境ほど

またと厄介なものはない

(金光林・詩「杭」より)

金光林さんは、国々の「地境」を越えようとし、ハイデッガーの思索した「存在者の存在」を問い、根源的な故郷を探し求める詩人だ。その詩篇は、日本でも何冊か翻訳され、眼に触れた方も多いだろう。しかし金光林さんの詩論や北朝鮮を脱出した生きた軌跡などを読む機会はなかったろう。本書を読むことによってその全貌があらわになる。飯嶋武太郎・志賀喜美子両氏の努力によって、金光林さんの存在を明るみに出すことが本書の願いである。そのことによって金光林という詩人が韓国・北朝鮮・日本などアジアの国々の宝であり、詩人の中の詩人であることが実感させられるだろう。金光林さんは誰よりも率直だ。その飾らない人柄は、童心や青年の志を決して忘れない強靱な精神の持ち主だ。二章「自殺その

手紙』には日本のママコノシリヌグイが韓国では「嫁の尻拭い」というと紹介されていた。朝鮮半島の人々と日本人は、国境のなかっただろう古代から深い交流があり、共通の文化的基盤を民衆たちは持つていたのだと想像される。二〇〇五年の暮れに私は、『詩の降り注ぐ場所』という題名の詩論集を出したが、それは釜山の夜景を一望できるかつての狼煙台から眺めると、韓国の民衆の精神がせり上がってくる思いのする場所から触発されたのだ。韓国・朝鮮半島は異国の他者の視線を感じさせるが、同時に懐かしい〈原故郷〉が湧き上がってくる場所なのだ。

金光林さんとの出会いは、一九九九年の詩誌「地球」の授賞式で韓成禮さんから紹介をされたことが最初だった。『韓国三人集 具常／金南祚／金光林』を読んでいたこともあり、その後も折に触れ再読し、突き詰めた独特の発想の詩人であり、日本と朝鮮半島の真の架け橋になっている詩人だと認識していた。同年に私は高炯烈さんとも出会い、高さんの『長詩 リトルボーイ』の翻訳を韓成禮さんの訳で詩誌「C O A L S A C K」(石炭袋)に掲載を開始したのだ。七年をかけて七九〇〇行もの『長詩 リトルボーイ』を全訳し、二〇〇六年八月六日に刊行し、高さんを招待して広島で出版記念会を開催することもできた。私は高さん韓さんとはほぼ同年代で、国を超えて、核兵器廃絶を心に秘めた「原爆詩」という世界文学のテーマを共有する同志だと考えている。私

気まぐれな行動」で世界中の自殺した詩人たちに寄り添い、その詩人たちに分け入っていく筆致は、人がいかに生きるべきか、死ぬべきかをわたしたちの内面に問いかけてくる。金光林さんの文体には国境を越えた体温があるのだ。この世に存在したい痛ましい詩人・芸術家へ共鳴し、その孤独な魂を見つめる視線は、深い感銘を与える。私は金光林さんのこの詩論・エッセイの前で自己の精神の鎧を溶かされる思いがした。

私は二〇〇五年に韓国・釜山に二度招待された。一度目は、二〇〇一年に新大久保で日本人を助けるために命を落とした青年李秀賢さんの四週忌で追悼詩を読むためであった。二度目は、朝鮮通信使文化事業会主催の韓日ジャズの夜に日本のジャズバンド「東京ファイブブリッジ」を出演させるためだった。一度目の二月初めの釜山には木蓮の蕾がふくらみ、春を待ちこがれているようであった。私が書いた李秀賢さんの追悼詩を読んだ財団の方が招いてくれたのだった。私は法事に詩を読ませるといふ、詩を大切にしている韓国人の心に触れたのだった。李秀賢さんのご両親が私の詩を深く理解し受け止めてくれたことに驚かされたのだった。二度目の釜山は秋で街角には露天商の果物があふれ、野草園には日本とほとんど変わらない野草が咲き群れていたし、そこに咲く一年中の野草の説明も写真入りでされてあった。例えば日本の翁草は韓国では「お婆さん草」だった。かつて読んだ黄大権著『野草が敬愛する齋藤忠さんの詩論集でも多くのページを割いて金光林さんのことを触れていた。きつと齋藤忠さん、今回菓解説文を書いてくれた白石かず子さん、相沢史郎さんや本書で紹介された日本の詩人達と金光林さんとは、国を超えた詩的精神の共有を確認しあつた同志なのだろう。

なぜ多くの日本の詩人が金光林さんに魅了されるのか。金さんの詩を愛する心の深さであろうか。北朝鮮から脱出した最大の理由は、一九四七年に起こった『凝春』詩集事件だった。郷土の詩人たちが編集した詩華集が、発売禁止、没収された事件に衝撃を受けたことだった。何度も捕まりそうな危険をおかして韓国に辿り着く様は、まるで映画を見るような展開であり、金光林さんを生かそうとする叔父と叔母たちや触れ合つた人々との温かい交流も胸を打つ。また朝鮮戦争を体験したその生々しい記録は、詩人しかかけない戦争における人間の強さや弱さの全体像を描き出している。これほどまで苛酷な体験をしながら金光林さんは天性の詩人を決して見失うことがなかったのだ。

金光林エッセイ集『自由の涙』は、訳者である飯嶋武太郎さんが十年もの時間をかけて翻訳したものに志賀喜美子さんが新たに訳したものを加えて完成させたものだ。これは日本の詩人と韓国の詩人の深い友情がなした本であり、主に飯嶋さんの主宰する日韓交流誌「むくげ通信」に翻訳されたものだ。飯嶋さんからこの翻訳書の出版の依頼があり、打ち合

わせをした時にこの翻訳書を出す動機を私に率直に語ってくれた。十数年前に奥様に先立たれ失意に暮れていた時に、金光林さんの詩に出会い、韓国語を独学することを決意して、金光林さんの詩や散文を翻訳しはじめたという。飯嶋さんにとって金光林さんとの出会いは、自らを生き返らせるきっかけとなったと私に語ってくれたのだ。金光林さんへの尊敬とその著作を後世に残そうという意志を感じた。飯嶋武太郎と金光林は私には窺いできない深い絆で結ばれているのだ。飯嶋さんは「むくげ通信」で現在も金光林さんを始め多くの韓国の詩人の作品を精力的に翻訳・紹介し続けている。たぶん日本の詩人よりも韓国の詩人の友人の方が飯嶋さんは多いと想像される。韓国・朝鮮半島と日本の友好を願う、韓国・朝鮮半島の詩人達を愛する想いでは、飯嶋さんにかなう人はいない。村松武司や齋藤忠の亡き後に、個人の力でこれほどまで実践している詩人は稀有な存在だ。私は飯嶋さん、志賀さん二人の無償の情熱に触れて、様々な思いの詰まった本書の出版に関わることができてとても嬉しく思っている。多くの日本の詩人、アジアや世界中の自由を求め苦しい涙を流して戦っている人たちにも読んで欲しいと願っている。きつとそれらの人々が目差している〈原故郷〉に芽吹く「自由の新芽」を金光林さんの存在が励まし促すだろう。